ノスタルジア・エンドロール 亡国再興記 【改訂版】

周 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノスタルジア・エンドロール 亡国再興記 【改訂版】

【Nコード】

N0303Y

【作者名】

周 紫苑

【あらすじ】

戦争の果てに世界の地図から消えた王国が在った。仇国に領地も資源も搾取される日々の中、未だに王国再興の精神を体现する者が居た。最後の血族、没落王国の王子だった。追憶を抱き続ける亡霊の叫びは世界に再び響くのか。陰謀渦巻く歴史の螺旋の中、王子は何を為す。

剣と魔法のファンタジー世界。戦記の要素を多く含みます。準最強系の主人公です。多少のご都合主義的な側面が見られる事が御座いますので、苦手な方は御注意願います。

1話 「境界で亡霊は叫ぶ」

第三次レザール戦争。

世界でも数国しか存在しない完全な独立国家エスフード王国と、大々的な物品流通の国際基盤を持つマズール王国との鉱山資源を賭けた争い。レザール鉱山は丁度二国間の国境線に頂を貫かせており、かねてから所有権の譲渡をかけて争ってはいたが、第三次レザール戦争はその中で最も熾烈を期した。事実、三度に及ぶ戦争はそこで終結し、多量の人命を犠牲にしてマズールが所有権を獲得、公に鉱山資源を搾取できる時代が訪れた。

第一次、第二次には両者の軍力は拮抗していたものの、第三次に臨むにあたり、マズール王国は戦力の増築を目的に或る協定連合への加入に踏み切っていた。加入国の相互交流円滑化を理念とし、無条件国境踏破法案、相互関税廃止、その他にもおよそ国の相違をあやふやにする規定を暗黙の了解とする協定連合群 《ヴァンガード》。

貴重な鉱山の奪取とあらば連合国家は無条件に軍力を貸し、結果マズールは虐殺に近い形でエスフードを下した。

一方のエスフードは完全独立国家である。

他国との貿易はするものの、根本では他国を拒絶し、中立を維持、他国間の戦争にも一切の干渉をしないという名目で自立していた。しかし、独自に自衛力を育てていた為、一方的な武力介入にも動じず、退かず、その土地を守り抜いてきた。

限界だったのかもしれない。

エスフードの土地は鉱山や天然資源に溢れており、他国から見れば貴重な資源を独占しているように見える。交易でその資源を平等に取引してはいたが、世界から独立しているという確固たる真実が裏で他国を刺激していた。

滅亡は目に見えていた。

ヴァンガード協定連合を後ろ盾にエスクードへ侵攻したマズールは武力という点において驚異的なまでの成長を遂げ、もはやエスクードには立ち討つ術はなく、狭い土地に住む国民を逃がすことしかできなかった。

そしてエスクード王国は滅びた。世界の地図から、エスクード王国は崩れ去り、消え失せた。

現在に語られる所の亡国エスクードの誕生である。
同種族間の戦争は哀しい物だ。

人間は何処まで愚かなのだろうか。

『レザール戦争の軌跡』 著：イース・マグナ 天曆3305年

神は信じない。信ずるは己の叫び。

旧エスクード領 現マズール領・ヴァンガード協定連合法下。

「エスクード王の敷いた善政も…あくまではエスクード国民にとつての善政であつて他国には悪政にしか見えなかつたのかもな」

マズール王国の檻が伸びていない田舎村の古びたレンガの家の中で、一人の青年が膝元に一冊の本を置きながら言葉を紡いだ。きめ細かな白い肌、日光を受けて煌めく長い銀髪は、彼の背元で無造作に黒い紐によって纏められている。目元に掛かる前髪の隙間からは、

深い真紅に彩られた瞳が覗いていた。一目見れば、誰もが超俗的な印象を得ずには居られない特異な容姿。青年は、目元に掛かる前髪を少し指でどかしながら、台所で家事に勤しむ一人の少女に視線を送った。

少女は彼の視線を小さく細い背中を受け、その視線に込められた言葉に気付いて振り向いた。

「私の意見を聞きたいの？」

「まあ　そんな所だ」

彼女は首元から掛けていたエプロンを解きながら、台所を離れて青年の居るリビングのテーブルへと歩を進める。青年以上に長く伸びた金系の髪は、一片の汚れもなく、澄んだ輝きを放っていた。女性にしては背は高い方で、整った目鼻立ち、すらりと伸びる細い四肢、透き通るような白い肌、仕草の一つ一つには独特の高貴さと無邪気さが混ざり合っている。通りすがりの男性が見れば、一たびに魅了されかねないような容姿と、流麗さを伴う動きで彼の横に椅子を持ってきて、彼の手の中の本を覗きこむように座り込んだ。顎元にまで伸びる長い金髪を、指で耳元に掛けながら、本に書かれた文字に目を通していく。

「政治の本？」

「端的に言っならな。リリアーヌにはまだ早かったか？」

「馬鹿にしてる？」

彼女は目元に少し力を入れて、ありつたけの鋭い視線を上目遣いで彼に送った。

「はは、そう怒るなよ。それで、さっきの話だけど」

青年は端正な顔に微笑を浮かべ、彼女の視線に応えた。

「そんなの、誰も判断出来ないと思う。だって、人にはそれぞれ違う価値観があるから」

彼女の口から出たのは、答えを保留しているような、同時に、酷く世界を達観しているような言葉だった。

「正に。それでも、世界は、人は、単一の秩序を欲している。少なくとも。でなければ戦争なんて起きないさ」

青年は幾許かの寂寥感を瞳に灯し、力無い微笑を湛えた。少女は青年を心配そうな視線で見つめるが、彼の瞳は彼女ではなく、自らの内側に向いているようだった。自分の内側に答えを模索しているような

彼の手も足も、表情も止まり、ただ瞳だけが瑞々しげに時折閃いている。

彼女は、不意に彼がそのまま何処かへ行ってしまうような気がして、咄嗟に彼の名を呼んだ。

「《ユーリ》」

青年はその言葉に反応して、一度瞬きをすると、自分の名を呼んだ彼女の顔に視線を向けた。丁度その頃、台所で炊きつけていた鍋がぐつぐつと大きな音を立て始めて、彼女は少し焦燥を含んだ声を上げて、台所へ駆けていく。

「焦げる焦げるー！」

その様子を微笑ましげに後ろから眺めていた青年は、彼女が煮え

たぎる鍋と格闘している間に膝もとの本を畳み、部屋の隅に置かれた大きめの本棚に戻した。そのままの足で、彼女の元まで歩み、細い指を彼女の金系の髪に絡めて、一度彼女の頭を撫でた。

「少し外を歩いて来るよ、《リリアーヌ》」

「うん、気をつけてね」

この平和な村で気をつける事なんかはないよ、と青年は返して、レング作りの家を出て行った。

村から少し離れた場所にある丘を目指す。辺りはからは日中の仕事を終えた村人たちの声が度々聞こえ、ささやかな活気に満ちていた。すれ違う村人たちに笑顔で挨拶をしつつ、ユーリはただ歩き続ける。

考え事があると、旧エスクード領がよく見えるこの丘に来るようになった。別段、特別な場所であるという訳でもなく、ただ単に静かで、景色がよく見えるから。考え事するには適しているのかもしれない。

「どうせ 答えは出ないのに、何故こつも考え続ける」

先の事なんて実際に会ってみなければ解らないのに、と付け加え、自分に言い聞かせるように言葉を紡いだ。丘の最上部まで昇り切り、その場に腰を下ろす。沈み始めた日の光が、同じような赤みを漂うわせるユーリの瞳をそれ以上に赤く彩った。

同じ輪廻を廻る思考が終着点に至る訳でもなく、しかし、その螺旋の思考を忘れられる程の別の思考が生まれる訳でもなく。

日が半分以上地平線に隠れ、地に注ぐ光もまばらになってきた頃、

ようやくユーリは丘から立ち上がり、リリアーヌの待つ家へ帰ろうと決心した。

こんな一日を一体幾度重ね続けてきたのだろうか。纏まらない考えと、定まらない決意に振り回されながら、この身をその場で漂わせる。

何時までもこの思索の日々が続く訳ではないと解っているのに

ふと脳裏に過る文字の羅列。嗚呼、その通りだよ、と自分ではない誰かに語りかけるかのように、ユーリは帰り際に呟いた。

丘から村の中に戻ってきた頃には、辺りは暗く、村の中に点々と立ち並ぶ街灯の光だけが村の中を静かに照らしていた。思いのほか遅くなってしまった物だ、と思ったよりも時間を長く費やしてしまった自分を少し叱咤し、足早にリリアーヌの待つ自分の家へと歩んでいく。

遂に家が見えた頃には、周辺から唾液をそそる様な良い香りが出て、都合よく空腹を主張する胃袋を宥めつつ、家の扉を開けて声を上げた。

「ただ今、リリィ」

「あ、御帰り、ユーリ。あんまり遅いから私が全部食べちゃおうかと思ってた所だったよ…」

「悪かったって」

リリアーヌは少し頬を蒸気させてユーリの非を主張する。大人しく彼女に謝罪の言葉を送り、そのままリビングの椅子に腰かけた。

彼女の作る料理の数々は、商品として出しても遜色ないと思われる程に美味で、いつもながら、彼女のこういった手腕の良さに若干の驚嘆を抱きつつも、止まらない手でその料理の数々を口元に持っていく。

対するリリアー又は一向に止まる気配がない彼のナイフとフォークに若干の畏怖を抱きつつも、満足げに言葉を紡いだ。

「ホントよく食べるよね…ユーリって。作りがいはあるけど」
「ん？」

「食材費の事も少しは考えて欲しいな？」

「まだ蓄えはあるじゃないか」

「食べながら喋らないの」

「ふあい」

喋りかけたのはリリイの方じゃないか、と心の中で言うが、ユーリは彼女の言葉に大人しく従って一度適当に返事をしてからとりあえず口の中の物を飲みこんだ。

「ユーリって品行さえ整えれば高貴な人に見えなくもないのに…」

「品行方正なリリアー又様に言われると弁解のしようも御座いませんよ」

「冗談めいた口調で、リリアー又の小言を適当にいなしつつ、ユーリは再び口に料理を運び始める。しかし、鶏肉のソテーを口元にフォークで持ってきた所で、リリアー又の些細な拳動の変化に気付いた。

リリアー又の耳が、ピクリと一度だけ脈打った。常人よりも幾許か長く、少しだけ尖がった細い耳が。

口元まで持ってきた鶏肉を一度料理皿に戻し、真剣な顔で彼女に

問う。

「どうした？」

「音：聞き慣れない音がする」

ユーリも耳を敬そはてるが、特に変わった音は聞こえない。しかし、ユーリはリリアーヌの言葉を全面的に肯定していた。彼女が言うのだから、何か異変が起きている、と。ユーリはナイフとフォークを静かにテーブルに置き、椅子から立ち上がる。

「リリイは此処に居る。俺が外の様子を見てくる」

リリアーヌは未だに眼を瞑こめて意識を聴覚に集中させている。彼女が聞いた音を、より明確に聞き取るために。

しかし、次の瞬間　ユーリでさえも聞きとれる程の『怒号』が村の中で響いた。ユーリの顔から穏やかさが消え失せる。確実な異変。確信

ユーリが家から飛び出そうとした所で、リリアーヌが咄嗟に声を上げた。

「待って！私も連れて行って！」

初めは断ろうと思った。しかし、彼女の怯えるような瞳を見て、彼女を此処に置いて行くべきではないと判断したユーリが直ぐに答えた。

「解った　手を離すなよ」

ユーリはリリアーヌの手を取り、家の扉を開け、彼女の歩幅に合わせてつつも、出来るだけ急いで怒号の出所へ走って行く。

走っている最中、不意にユーリの脳裏にまた文字の羅列が浮かんだ。

決意の刻が来た　と。

怒号の発信地に近づけ近づく程に、怒号は確かな言葉の繋がりと
なってその意味を報せていく。村人の声、聞き慣れた声だった。

「近いな」

そして　『現場』に着いた時、ユーリは愕然とした。

「てめえ！よくも！」

豪勢な髭を蓄えた村大工の一人が怒りの籠った声を上げている。
何度か世話になった事もあるその村大工にはユーリも当然見覚えがあつた。しかし　もう一方。その村大工の男が怒声を投げかけている相手。

見慣れぬ鎧姿の騎士である。

一、二、三、……多すぎる。これでは騎士団だ。そうユーリは心
の中で冷静に呟いた。騎士達の鎧甲冑には《マズール王国》の紋章
鷲の翼と上半身に、獅子の下半身を持つ《グリフォン》の肖像
が彫られている。

ユーリの頭はその紋章を見て即座に、彼らが何者であるかを弾き
出した。

何故マズール騎士団がこんな田舎の村に

そう考えている最中　ユーリの体は咄嗟に動いていた。

怒声を放っていた村大工が、不意に剣を抜き去った騎士の斬撃をまともに受けたからだだった。

不味い、致命傷だ、と眼の前の光景を見て村大工の傷の深さを的確に判断する。

「！」

「喋るな！」

内臓の損傷によつて、口元から鮮血の泡を垂らしながらも、村大工は何かを言おうとしている。ユーリはそれを止めようとするが、怒りに支配されている村大工の方は一向に大人しくなる気配がない。しかし、傷の深さも相当で、徐々に声を出す事も辛くなってきたのか、その村大工は遂に喋る事を止めて、一挙手で全てをユーリに伝えた。彼の指さす先。

血に伏す老婆。

ユーリがその姿を見つけた時、ユーリの前に村大工を斬り捨てた騎士が歩み寄ってきて口を開いた。

「我らは《マズール王国》よりこの村の『管理』を任された。此処からでは少し遠いが、十数キロ先に新たな鉱山が発掘され、その労働資源としてこの村の住人を使う予定だ。村にいるのはマズール領において納税すらしていない村民達だ　マズール王国に仕える事が出来るだけ有り難く思え。年老いた者は労働資源として使い物にならない故、切り捨てることになっている。これは報いだ。《エスクード王国》などという幻想に囚われつづけ、新国家への忠誠を忘れた者達よ。せめて幾許かでもマズールを想うがいい」

ユーリはその言葉を聞いて、状況を掴む。掴まざるを得ない。その行動の結果を、目の前に提示されているのだから。だが、納得など出来ない。騎士の発した言葉はユーリにとって余りに理解に容易い言葉だった。エスカード王国とマズール王国。相容れない二つの国。その辿ってきた軌跡を、ユーリは理解し過ぎていた。

騒ぎに駆け付けた村人たちは、啞然として立ちつくしていた。

その騎士が、駆けつけた村人たちをぐるりと見回していく。そしてその視線はある一点で止まった。騎士はリリアーナを見ていた。容易く人目を引く美貌を持つ彼女。目立たない訳がない。

ユーリが村大工を優しく村人たちの側へ寝かせ、凝視に晒されるリリアーナの元へ戻ろうと思った時だった。血の匂いで思考が緩んでいる隙　　ユーリが不味いと勘付くより早く、騎士は驚愕の声を並べていた。

「エルフ　　何故こんな所に《エルフ》がいる！」

騎士が物騒な目つきで腰の鞘から剣を再び抜き去る。ずかずかと周りの村人たちを剣で追い払い、リリアーナの眼の前まで歩んでいく。殺意の籠った視線に晒され、リリアーナは一步も動く事が出来なかった。きつと彼は私を殺すのだろうという確信。それ程までの殺意の視線。そんな確信を抱きつつも、彼女は言う事を聞かない手足に諦観を抱く事しか出来なかった。

「貴様達は何を考えているのだ！エルフは人間の敵だぞ！一体何人がエルフに殺されたと思っている！何故殺さない！《グラン聖戦》の記憶を忘れ去ったか！」

騎士は歩を緩めることなくリリアーナに近づき、彼女の眼の前で止まると周りの村人たちにそう告げた。村人たちは反応できない。彼らにとって、グラン聖戦という言葉は違う意味を持っていたから。

「エスクード人め…やはりエルフと繋がっていたか！マズール領に於いて仇敵であるエルフを匿う事は重罪である。貴様らの処遇は後々伝えるにしても、今この場でエルフが生き永らえる事は許されない」

騎士は剣を振り上げていた。月光を反射する剣を、ただ茫然と見つめるリリアーヌ。そして 騎士の振り下ろした剣がリリアーヌの脳天に迫っていった。

が 剣がリリアーヌを切り裂くより早く、ユーリがリリアーヌの元に走り出でて、彼女を庇った。倒れこむようにリリアーヌを抱きかかえ、一振りの斬撃から彼女を守る。

自分の剣が空を切った事に気付いた騎士は、リリアーヌを庇ったユーリに対して怒りの籠った声を上げた。

「貴様…何故エルフを庇う。忌まわしい『戦乱の記憶』を忘れたか！ そのエルフを生かしておけばまた人間が殺される！ どれ程の同胞が死んだと思っている！ 今すぐ殺せ！そのエルフを！ 殺さぬならばそこをどけ！」

「断る！」

「ならば貴様ごとく！」

ユーリは真つ向から騎士に反抗の意を示した。騎士はその言葉を受け、ユーリもろとも切り捨てようと剣を大きく上段に構えた。

リリアーヌは怯え、ユーリの服の裾を握りしめたまま凍った。美麗な顔が恐怖に歪む。

騎士が剣を振り下ろさんと柄を握る両手に力を込め

体は無意識の内に反応した。

身に刻まれた『戦乱の記憶』が呼び覚まされる。

不意に、ユーリの真紅の両眼の片方　　右眼が金色に輝きを変え、同時に、ユーリの左掌から光が洩れる。

そして　　右手が左掌から『何かを引き抜いた』。それは剣。

儀礼用と思えるまでの美しい装飾が施された　　剣。

「何ッ!？」

驚愕の声。それが騎士の最期の言葉だった。

振り下ろされる騎士の剣を凄まじい剣速の横一閃で弾き飛ばし、即座に上段刺突の構え。顔の横で刃が閃いた。その状態から、一寸も待たずして繰り出された猛烈な速度の刺突。剣を弾き飛ばされ、状態を崩した騎士に為す術はなく

騎士の心臓を貫く剣は流れ出る赤に染まり、尚も閃く。

ユーリの手には『馴染み深い感触』が伝わって来ていた。

死の感触。

生気が枯渴していく、否、生気を吸い取って行くかのような。嫌な感慨に更ける。剣を騎士の体から引き抜いて一度振り、その刀身から血を払うユーリ。倒れた騎士を一瞥し、不気味な金と紅の三白眼を後列の騎士たちに向ける。突然の出来事に、他の騎士達は一瞬怯んだが、直ぐに状況を理解したようで隊列を組んでユーリと相対した。

「リリイ、下がっている」

怯えきつたりリアーヌを手で促す。彼女はようやく掴んでいたユーリの服を放して少し後ろへ下がった。

「貴様、自分が何をしたか解っているのか？」

若干震えている声で、ユーリに問う後列の騎士が一人。それは怒りによる震えなのか、怯えによる震えなのか。ユーリはそれに対して何かを言おうと口を少し開いたが、直ぐにそれを閉じた。言葉を発している騎士のさらに後ろから、剣を振りかざして走ってくる人影が三つ。ユーリは即座に剣を構え直し、迎撃態勢に移る。

まず一人、突っ込んできた騎士が剣を振り下ろすより速く、瞬間的な加速で真正面から懐に潜り込み、袈裟に切り払う。刀身を切り返し、二人目を横になぎ払った。そのまま三人目に斬りかかろうとしたところで、ユーリの視界の端で奇妙な光が点滅する。後列で待機していた騎士の仕業だった。騎士と言えども剣は持ち合わせていないその男が両手で包み込むように抱えていた物は 人の頭大の『炎の塊』だった。ちかちかと明滅し、燃え盛る炎の塊。その騎士の足元には光り輝く幾何学模様とルーン文字列 《魔術式》が描かれていた。

「魔術師か」

魔術師に視線を一瞬移し変えている内に、眼前に迫っていた三人目の騎士の斬撃を、ユーリは軽業師のような軽快な後宙返りで避け、着地と同時に加速、斬り抜ける。背中で纏められた銀髪の一房が宙を舞った。そこで、遂に後列の魔術師が動く。両手に包んでいた炎の塊は一気に巨大化し、魔術師が炎の塊を前方に打ち出した。ユーリに向かって飛翔してくる炎弾は、その射程内の大気をちりちりと燃やしながら、遂にはユーリの視界の大半を遮る。

ユーリに慌てる様子はなかった。

剣を片手で握り、もう片方の掌を炎に向けて伸ばし、開く。

ただ、その掌で受け止めるように。

すると炎に向けた掌から巨大な魔法陣が瞬時に広がり、飛んでき

た炎弾を受け止めた。弾けるような音を放ちながら、ユーリの掌から広がる魔法陣と炎弾がぶつかり合う。鏢迫り合いのような衝突が少しの間続くが、ついに炎弾の方が急激に推進力と火力を失い、分散する。消えそうになりながらそれぞれが進路をずらし、宙で掻き消えて行った。

炎弾を飛ばした魔術師が驚愕の表情を浮かべた。

「無詠唱魔術で私の魔術を受け止めるなど」

ユーリは炎を受け止め終わると即座に走り出し、無防備な後列の魔術師に飛びかかる。他の騎士が剣を抜き、魔術師を守る様に進路を変えるが、凄まじい速力を誇るユーリに追いつく事が出来ない。そしてユーリの剣が魔術師の首を切り飛ばした。

たった数十秒の戦闘だった。

一対多数の戦闘は、当初虐殺に近い物になるであろうと思われた。だが、あるうことが圧倒的な力量差を見せつけたのは一人の方。

驚愕の表情のまま宙を舞った魔術師の首が無残にも鈍い音を立てて地面に墮ちる。

それ以上ユーリに向かってくる者はいなかった。

生き残った数人の騎士が、その光景を見て畏怖によって硬直した手足を必死に動かして撤退を始める。その時、離れていく騎士に聞こえるように大声でユーリは叫んでいた。

刻め！そして王に伝える！我が名は

旧エスカード王国第一王位継承権所持者。マズール王国に滅ぼさ

れたエスカード王国の末裔である、と。

ユーリの胸には決意が浮かんでいた。

亡国の亡霊は叫ぶ。

その存在を世界に報せるように。

必死に、力強く

2話 「郷愁と決別」

旧エスクード王、つまるところシャル・デルニエ・エスクードは青年期、王室関係者であるというのに傭兵として過ごした日々があったと言う。

青年期の彼を知る傭兵仲間の話では、ある戦争では英雄と呼ばれ、ある戦争では戦神と呼ばれるほどの人物だったらしい。

武芸に優れているのは二つ名から容易に想像できるものの、また他の参考人からはまるで戦神という言葉からかけ離れている話を聞いた。

彼は戦中に、何人もの『敵』を救ったらしい。エルフと人間が大々的に対立した《グラン聖戦》では、エルフが人間の物量に圧され、撤退を始めた頃にエルフ陣営の最後尾に表れると、たった一人で人間軍の追走戦を退けたという。人間軍も摩耗していた事には変わりはないが、それでも尚、その追走を退ける事が出来たのは、違う事なき戦神の力があってこそ。何より、世界一般的にエルフを狩るべき立場にある人間が、同じ人間の前に立ちほだかるのは並大抵の精神力では出来ない。同じ人間を敵に回す可能性すらあるのだ。

ともかく、不思議な人物であることに変わりはないが、どこか愛着の湧く人物像である。それは勿論、私自身がエルフ支持を主張しているからだ。

彼が正式に王位を継承し、エスクード王となつてからもヴァンガード協定連合には加入せず、世界地図の位置からして西方の辺境地で独立国家を守り続けた彼は変わり者と言えるのかもしれない。

周辺各国から独立状態を維持しながらも、繁栄を期していたレザール戦争前のエスクードには何か後ろ盾のようなものがあつたのか。私の推論ではエルフが関係している気がする。根拠は殆どない。

しかし、エルフを救ったという噂話がある以上、そう思わざるを得ないのも事実だ。

確たる証拠もなく論述するのは些か不恰好ではあるが、此処に私は明言して置く。

今ではエスクード王は死に、国すらも崩壊してマズールに取り込まれた状態だ。あの虐殺の中でエスクード陣営の要人が生き延びたとは思えない。エスクード王には一人息子がいたと言われているが、彼も生きてはいないだろう。

レザール戦争下でたった一人生きていたと言うなら息子は修羅になっっているかもしれない。

いや、仮定で話を進めるならエルフからなんらかの助力があった可能性も捨てきれないか。

私個人としては、かの英雄の息子が生きていることを切に願っている。

こんなことを言っていればおそらく私もマズールに目を付けられるだろう。

だが、この時代の印が後世に残ることを強く望む。

『エスクード考察記・下』著：グステンシュタイン・マーグ 天歴
3307年

一夜明け。

騎士に切り伏せられた村大工は死んだ。十分な医術が整っていないこの辺境の田舎村ではやりやうに限りがあった。

そして 村大工と老婆の弔いが、次の日に行われた。

簡易的な墓の前に集まる村人。そこにユーリとリリアーナの姿もあった。言葉数は少なく、無言に近い中、ただ鎮魂歌を謡う幼い子供たちの声はその場に残響した。

鎮魂歌が止み、一人ずつぽつぽつと村人が去って行く中、何人か

の村人だけが残り、同様にその場で立ち竦んでいたユーリとリリアー
ー又にも声を掛けた。

「これから…どうなさるのですか」

ユーリが自らの正体、身分を公表した以上、旧エスクード人である
村人たちは敬意を含む言葉で問いかける。それに対してユーリは
静かな無表情を湛えたまま、答える。

「リリアー又と共に村を出ます。俺達がいる以上、この村は狙われ
続ける。いや、もう遅いのもかもしれない。多大な迷惑をかけた
ことをお詫びします」

神妙な顔つきのユーリを見て、村人たちは涙を流した。

村人が二人も居なくなつた事、エスクード王国の最後の希望が生
きていた事、その王子が、自分を責めている事。諸々を含めて、複
雑な涙を流す。

「貴方様がまた流浪の旅へ出なければならぬのは心苦しいことで
す。どうか貴方に竜族の御加護がありますように」

竜族 旧エスクード王国の紋章である。普段ならば、自分たち
がエスクード人である事を知らせる情報を口にするのは憚られる物
であつた。此処はマズール領なのだ。しかし、眼の前で佇んでいる
のは誰もが敬愛した最後のエスクード王の息子。シャル・デルニエ・
エスクードの時代をよく知る初老の村人たちは、その最後の王の息
子を責める事も、助ける事も出来なかつた。唯、遙か昔にエスクー
ド建国に助力したと言われている。実際に存在するのかどうか
も解らぬ竜族に、無言の情けを乞う事しか

ユーリは考える。昨日の騎士たちが本拠地　つまりマズール王国に戻れば、事の詳細は伝わる。マズールに反逆した旧エスクード人の村。其処に存在した仇国の王子。同じく、忌み嫌われた種族の娘。

もう後戻りは出来ないな、と心の中で呟く。

ユーリは老人の言葉を受け、不意に懐から紙切れを一枚取り出して渡した。

「この地図に記してある場所に我が父の遺産が多少ながら埋められています。それを資金源に貴方達も村を出てください。数日すれば昨今のマズール騎士団が総力を挙げてこの村を潰しに来るでしょう。私の作った火の粉で貴方達まで焼け死ぬことはない。どうか…逃げてください」

悲痛な言葉を紡ぎながら。

「王子殿下がそう言いなさるのでしたら、そう致しましょう。しかし、殿下はどこへ行くおつもりなのですか。此処は辺境地、それも今やマズールの支配下です。近場に栄えた街もなければ…貴方にとつて周りは敵だらけでしょう」

「…それを承知でマズールの王都^{キール}へ向かいます」

村人たちが目を見張った。わざわざ敵国の本土に向かうとはどういう了見なのか。しかし、鋭い決意に満ちたユーリの目を見た上で、詳細を訪ねることは躊躇われた。それを止める事は尚更である。

「今までお世話になりました。いつかまた…出会えることを祈っています」

ユーリは踵を返し、リリアー又はユーリの服を掴んだままそれに

釣られる様に一度村人に頭を下げ、背を向けた。

「ユーリ、村人の皆：大丈夫かな……」

ユーリの「旅に出る」という言葉を受けて、家の中の物を出来るだけ早く整理し、同時に旅に必要な物だけを選別している最中、リアーナがユーリに訊ねた。

ユーリには村人たちに危機が迫ることが明白だと解っていた。今から村人総出で村を発つ準備をしたところで、遅いのだ。騎士は馬という迅速な移動手段を持ち、また、騎士である以上追跡の技術もあるだろう。村人の方は、ユーリの了見の所、おそらく村を発つのに三日は要する。何処に向かうかも定まらず、故に廢墟に迷い込まぬ様に、長い間を生き抜ける様に、荷物は多く、幼子や老人が多い事も相まって移動速度は大したものにならない。

確実に追いつかれる。

「きつと大丈夫だ。心配するな、リリイ」

確信のない薄っぺらな言葉しか返せない自分が恨めしかった。

しかし、同時に、彼らを救う一つの方法も知っていた。唯一の希望、それはマズールキール騎士団が追走隊を放つより先に彼らの本拠地、つまりマズール王国王都へ向かい、『手を打つ』こと。そこにしかない。

ユーリは頭の中を廻る思考をそこで一旦切り、旅用のバックパックに残りの旅用品を力づくで押し込んだ。

そして先に支度を終えていたリアーナの方を振り向き、彼女にこれ以上の不安は抱かせまいとある限りの理性を総動員して柔和な

微笑を浮かべ、短い言葉を紡いだ。

「行こう、リリイ」

リリアー又は賢かった。故に、その微笑が含む意味に咄嗟に勘付いてしまっていた。それでも、ユーリが逆にその様子に勘付かないようにと、彼女も優しい微笑を顔に貼り付けて答える。

「うん、行こう、ユーリ」

ユーリは微笑んだりリリアー又の手を取り、彼女の手を掴む手に少し力を込める。この手だけは離すまいと 胸に刻みつけて。そして 全てを取り戻して見せると、決意を込めて。

最小限に抑えた荷物を背負い、風を防ぐ為の大きめのマントを体に巻き付け、リリアー又と共に家を出た。

さようなら

マズール領 ヴァンガード協定連合法下、王都キール。
マズール王城内謁見の間

壮大な天使の絵が天井に描かれている謁見の間で、マズール王は耳を疑う報告を部下から聞いていた。少し灰色掛かった山羊髭と、同じ色の長い巻き毛を揺らす初老の男である。淡い緑の瞳はそれとなく狡猾さと隙の無さを見る者に窺わせ、彼が頭上に冠むる金で彩られた小さな王冠にはグリフォンの肖像。その頂を得る者が、確かにマズールの王である事を如実に報せていた。

「頭を上げよ。下を向いては報告するのにも難い。そして申せ、何があつたのかを」

謁見の間の玉座に座るマズール王の前、三段の階段の下側で、片膝をついて報告をしているのはマズール王国独自の防衛力にして、最大戦力である《マズール騎士団》を率いる長 《ケーネ・ヴァスカンド》であつた。短く切り整えられた灰色の短髪、マズール王の言葉に従い、階段状のマズール王を見るその双眸には僅かに青み掛かる強い意志の籠つた水色の瞳。切れ長の眉は上に傾いており、一層彼の瞳に宿る意志の強さを強調させる。騎士団を受け持つには些か若さが残つているようにも見えるが、くつきりとした顔立ちと無駄の無い立ち振る舞いには、清廉という言葉が似合う。重装の鎧に身を包み、腰にはマズール紋章の刻まれた幅広の剣の鞘。ケーネ・ヴァスカンドはマズール王の許しを得、直ぐに言葉を並べていった。

「はつ。昨夜、旧エスクード領の土地管理に遣わせた部下が王都キールに戻りました。彼らには旧エスクード領東部の境界を宛がっておりましたが、予定よりも早くに王都へ帰還した部下に理由を問い詰めた所、虚言とも妄言ともつかぬ弁が返つて来たので御知らせに参つた次第です」

「虚言とも妄言ともつかぬ言葉を か？」

「はい、個人の判断で有耶無耶にしまつべきではないと判断致しました。此処に部下の言葉を述べさせて頂きます」

ふむ、とマズール王は少し首を傾げた。少なくとも、マズール騎士団の末端の騎士の虚言を態々王に伝える訳もなかるうと思ひ、少々の疑問こそあれど、とりあえずはケーネの言葉に耳を傾ける。

「旧エスクード領東部境界にて、旧エスクード人の隠れ蓑となつていた田舎村を発見。同東部に於いて最近発掘された鉦山の労働資源

として活用しようとした所　この点に尽きましては別に私の言葉で述べさせて頂きますが、今は割愛致します　その村で不意の戦闘状況に陥ったようです。然し、同村にて戦闘状況を継続している最中、ある一人の青年が状況に介入。誠に申し上げるに難き事ですが、そのたった一人に青年に派遣されていた騎士の大半が壊滅させられました」

「エスクード人…か。奴らの持つ『血』は争い事に向いているからな…多少の犠牲は止むをえまい。それで、報告はそれだけか？」

「いえ、肝心の所が御座います。騎士達は撤退際に、その青年がある伝言を我らが王へと伝えるようにと言葉を紡いだようなのです。その内容が問題とする所で　彼はこう宣言したのです、我が王

「我が名は《ユーリ・ロード・エスクード》。マズール王国に滅ぼされしエスクード王国の末裔である、と。」

「《ユーリ・ロード・エスクード》」

マズール王の表情が一瞬にして曇った。

忘れもしない、とマズール王は心の中で同時に毒づく。第三次レザール戦争において、唯一生死を確かめる事が出来なかつたエスクード王国要人。そして、最も生死を確認しなければならなかつた者である。エスクード王国の王子は一人だった。シャル・デルニエ・エスクードの妃が子を産むという事に関して、あまり恵まれていなかったからである。そしてその妃はレザール戦争にて没した。この眼で見たからには違う筈が無い。とはいえ、シャル・デルニエ・エスクードが没した状態なら、この際妃の生死など些細な問題だった。問題なのはシャル・デルニエ・エスクードがその身に宿すエスクード王の血の系譜であり　そして、最も重要なのは、その時点でエスクード王国を継ぐ可能性のある存在の生死である。

「それは真か、ケーネ」

マズール王はケーネに対して真偽を問うが、まず以て、ケーネ自身が部下の言葉を虚言妄言の類と称している限り、彼自身に真偽を決定する材料はない。

「明くまで、で御座います。真実をこの眼で見極めるまでは、私個人では判断のしようがありません」

「いや、構わぬ。私の方こそ下らぬ事を言ったな」

マズール王は少し苛立った様子で自分の頭を掻いた。虚言であればいい。むしろ、虚言であってくれ、と思う。マズール王はエスクード王族にある種の畏怖を感じていた。そして脳裏に過る最終的な疑問。その青年は本当にエスクードの末裔なのか。

「その者の特徴を部下らは見ていたか？ 特徴について何か言っていたか？」

「御意に御座います。それ故に、私は此処に参りました」

ケーネはマズール王の言葉を予測していたかのように、即座に言葉を紡いだ。

「部下にその人物の外見的特徴を述べさせたところ」

その者は『銀の髪』と『真紅の瞳』を宿していたと、とケーネは発した。

言葉を聞き、マズール王は疲れ果てたように「嗚呼……」と短い声を上げた。ケーネはマズール王の様子を見て、個人的な確信を得る。

「虚言ではなかった、と言う事でしようか」
「……正に。あの忌々しいシャル・デルニエ・エスクードと同じだ。『銀の髪』と『真紅の瞳』はエスクード直系王族の最たる特徴。…間違いないだろう」

最後の言葉はまるで自分に言い聞かせるように呟かれた。マズール王の意気が消沈していく様子をケーネは傍らで見ていた。マズール王はエスクード人を恐れている、という事実が眼の前の光景から伝わり、これ以上王を苦しめる事もないだろうと、ケーネは咄嗟にせめてもの慰めの情報を声に出した。

「恐れながら陛下、私自身部下の話で奇妙に思う節があります…」

ケーネは畏まって言った。その表情には微塵の動きもない。

「部下達の話によると、その青年は《魔術》を行使したようなので。さらにその時、右の真紅の瞳が黄金色こがねいろに変色していたと」
「魔術…だと？」

誠に御座います、とケーネは端的な返事をする。

マズール王は思案するように顎元の髭を何度か指で摩り、声を発した。

「その一点に於いては何かがおかしいと言わざるを得えないな。エスクード人は古来より『魔術の資質』に恵まれていなかった。自然出産で生まれたエスクード人にはまず魔力が宿ることはない…。それに 金色に染まる瞳か…。ベルマール、何か心当たりはあるか？」

そこでマズール王は思いだしたかのようにふと謁見の間の玉座側から、真横に向かつて声を投げかけた。謁見の間の上部から玉座の左右を覆い隠す様に垂れ下がった紅色のカーテンの裏から、一人の男が姿を表す。

「いいえ、陛下、私には心当たりは御座いません」

白い肌に整った顔立ち。年齢は二十代半ばぐらいか。老獺さを湛える紫の瞳の光と、落ち着き払った雰囲気とは裏腹に、その男はひどく若く見えた。長い金髪は肩を優に覆い、紫の双眸は言葉を発した後も穏やかな光を灯している。

「ふむ…『旧エスクード人のお前なら』何か知っていると思ったのだが…」

再び思索に耽るマズール王。ふとその後続いた言葉があった。

「シャル・デルニエ・エスクードの下で『王国宰相』をしていたお前にも解らぬか」

「ええ　　心当たりは御座いません」

紫の双眸は表情の変化を湛えない。全く動じない微笑を湛えたまま、ベルマールは答えた。

マズール王は、心の中で何も知らぬ筈があるまい、と思っていたが、何にしても、この妙に老獺染みた男が情報を口走る事はないだろうと思ひ、一旦彼に対する尋問を取りやめた。

「まあよい。　　ケーネ、土地管理については継続して行うよう伝えよ。やり方はお前に任せる。同時に、エスクードの末裔を語るその者の正体を更に正確に調査するよう別働隊を派遣するのだ。そ

の者を捕縛出来た場合は　　私の前に連れてこい」
「はっ、御意のままに」

マズール王の王命に対し、ケーネは短い返事の声を上げると、徐に無駄のない動きで立ち上がり、一度マズール王に向かって頭を垂れ、即座に踵を返した。

そこで、マズール王が思い出したように一人ごちて呟いた。

「ユーリ・《ロード》・エスクードか　　大層な名だな」

ベルマールにとっては、いつもの見慣れた謁見の光景だった。しかし、彼は今、歓喜に満ち、そして震えていた。その感情を愚かにも表には出さまいと、ベルマールは理性を総動員して柔和な微笑を浮かべ続ける。変化を悟られてはいけない。横で玉座に座り、思案気な顔をしているマズール王に

「陛下、私めはまだ執務が残っております故、先に失礼させて頂いても宜しいでしょうか」

声は震えていないだろうか。ベルマールは内心に若干の不安を抱きつつ、言葉を並べたてた。

マズール王はベルマールの内心に気付いている様子もなく、ベルマールを尋問すると言うよりも、どちらかと言えば未だに自分の思考に区切りをつけて置きたいようで、少しの間を置いてベルマールの言葉に返答した。

「良い、下がれ。未裔について何か解れば逐一知らせよ」

「御意のままに　　」

ベルマールはいつものようにゆっくりと足を動かし、足早になつてはいないだろうか、等の些細な不安を再び抱いて、しかし、ようやく王座側にあるマズール王城の廊下への扉を潜り、同じようにゆったりとした動作で扉を閉めたところで、声を出さずに、それでも大きく深呼吸をした。

《ユーリ》。《ユーリ・ロード・エスクード》。なんと聞きなれた名か。

ベルマールにはマズールにおいて最大の『穢れ』とも見なされる過去があった。それはベルマール自身の行いから来る物ではなく、正確にはマズール王によつて身に刻まれた後天的な穢れである。

旧エスクード王の側近にして　エスクード王国の宰相。それがベルマールの過去の身分である。

そんな彼が何故、今ではマズール王の側近をしているのか。

理由は単純で、解りやすい物だった。ベルマールは王の側近として最上級の力を持ち合わせていたからである。政治力、戦術力、そして　個人としての武力。全てを高次元で持ち合わせていた。

その脅威性を誰よりも知っていたのは、敵国の元首であるマズール王その人。一たび反抗すれば、ベルマールの畏怖にすら値する多彩な能力を自分の身に刻まれかねないという状況にある中、それでも、故に、使えるものはどんなものでも活用しようとする意気の強い現マズール王は、ベルマールを第三次レザール戦争終結後に捕虜として確保した際、誓約系魔術で、とある誓約と制約を彼の体の内に刻み込み、同じく一国の王である自分の片腕として使用することを決めたのだ。

「嗚呼、しかし、何ということだろう」とベルマールは自室で誰

にも聞こえないように呟いていた。

ユーリが生きていた。これ程までに歓喜を覚えたことがこれまでにあっただろうか。

仇敵の王に仕えなければならぬという絶望に近い暗闇の中で見つけた光。銀の髪に真紅の瞳、そして 『魔術を行使するエスクード人』。ベルマールは知っていた。シャル・デルニエ・エスクードの一人息子であるユーリ・ロード・エスクードが、エスクード人として生を受けながらも、ある特異な理由の所為で魔術の資本である『魔力』を体に宿している事を。

どう考えてもユーリだ、と何度も確かめるように頭の中で反芻する。愛する友の息子。あるいは、自分の息子のように可愛がったエスクードの第一王子。

そして ベルマールの胸にはマズール王に仕え始めてから心の奥底に沈殿していた光と決意が浮き上がっていた。

「これで、私にもやらねばならぬ仕事が増えたようです」

全うしましょう、最後の君の命…否、願いを

ベルマールはほんの一瞬だけ決意の籠った鋭い視線を自室の窓から外に見える空へと投げかけ、しかし、次の瞬間には直ぐにいつも通りの微笑を浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0303y/>

ノスタルジア・エンドロール 亡国再興記 【改訂版】

2011年10月30日03時09分発行